

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520270

研究課題名（和文）イギリス・ロマン主義文学作品の生成過程と正典化についての実証的研究

研究課題名（英文）Empirical Research on the Process of Formation and Canonization of Major English Romantic Texts

研究代表者

藤巻 明 (FUJIMAKI AKIRA)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：30238604

研究成果の概要（和文）：サミュエル・テイラー・コールリッジとトマス・ド・クインシーの二つのテキストを通してロマン主義文学作品の生成と正典化の過程を実証的に検討することによって、一方では作品を完成した芸術作品としてのみ扱い他の要素を考慮しないニュー・クリティシズムの立場、他方では芸術性を忌み嫌い全てを政治性に還元して文学を考える新歴史主義批評という両極端の間に第三の道を見つけ、芸術性と政治性の間で均衡を保ちつつ文学を批評する立場が不可欠であることを確認した。

研究成果の概要（英文）：

By detailed research on the process of formation and canonization of English Romantic texts by Samuel Taylor Coleridge and Thomas De Quincey, it has been reassured that we should find another balanced critical method between two extreme literary criticisms, New Criticism, which treats literary texts just as artworks rejecting every other consideration, on one hand and New Historicism, which reduces everything in literature to politics despising aesthetics, on the other.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：英文学

1. 研究開始当初の背景

（1）この研究の着想に至った動機は、2003-2004 年度の科研費萌芽研究「定期刊行物へ

の寄稿によるイギリス・ロマン主義文学の自己形成と世論形成」で、代表作として認められている詩人の作品を、その生成過程の中に

置き直してみると、静物としてではなく流動物としての姿が現われ、ニュー・クリティシズム以来脱構築批評を経由して今も残る伝統、つまり、作品を一個の完成物としてのみ考える伝統に沿ってはいは捉えきれない側面が見えてきたことにある。その一方で、歴史的な脈の中に文学作品を位置づけようとする方法は、1980年代以降新歴史主義として文学批評の大きな潮流になったが、この流派は、当時の歴史状況と文学作品を半ば恣意的に結びつけ、詩における政治性の不在こそが政治性の存在を証拠立てるとして、政治を詩の中から抹殺した詩人たちの弱みを攻撃することに終始している。歴史性を捨象した静物として作品を見るにせよ、作品中に存在しない歴史性をすべて隠蔽工作だとして作家を批判する材料に使うにせよ、こうした歴史性をめぐる両極端の立場の間のどこかに、歴史性と作品を効果的に結びつける第三の道を見つけるために、文学と歴史の関係を実証的に検討し、最近ただでさえ地位が危うくなっている文学研究を、その陥りやすい一面性と非現実性から多少なりとも救い出して、復権の方向へ向けられるかもしれないと信じてこの研究に着手した。

(2) それは同時に、政治性ばかりでなく、作家の置かれていた精神的状況はもちろん、財政その他の物質的状況も含めて、驚くほど多様な要素からなる作品生成過程の力学を解き明かすことでもあり、さらに、複雑な生成過程のダイナミズムを再現することで、その後、どのような批評的受容を経て、完成物、静物として祭り上げられ、「正典」化されて、さまざまな批評的尾緒が付いて、執筆されたばかりの時にあった起爆力がそぎ落とされていった経過を見ることにもつながると考えた。

(3) これは、作品成立後の批評史を丹念に辿り、積み重ねられた批評一つ一つの功罪を問い直す作業になるだけでなく、作家の自己形成の要素として、ハロルド・ブルームが先行詩人からの「影響への不安」という過去への眼差しばかりを強調したのに対して、読者・聴衆による「受容への不安」の観点からの見直しを提起するルーシー・ニューリンの示唆を受けて、未来へ向かって開かれた作家と読者・聴衆の緊張に満ちた相互関係を検討することになるとも期待した。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、まず、フランス革命の影響下保守派と急進派に分かれて争う騒然とした18世紀末のイギリスにおいて、革命支持派として政治色の濃い文学活動を開始したロマン主義詩人たちが生み出した作品について、当時の歴史や社会の状況、とりわけ興隆しつつあったジャーナリズムと作家の関わりを視野に入れて作品の生成過程を実証的に把握することにある。

(2) さらに、その後作品が正典化されていく段階でつけられた尾緒をできるだけ取り払った執筆当時のままの姿で捉え直し、ロマン主義文学の周囲に張り巡らされてきたさまざまな常識の壁を打破することにある。

(3) こうした作品生成過程と正典化の実証的再検討により、作品本来の姿に立ち向かい、その喚起力を正しく評価できる批評方法の確立へと繋がることを期待する。

3. 研究の方法

(1) ロマン主義詩人ウィリアム・ワーズワス、サミュエル・テイラー・コールリッジ、

及び二人と密接な関わりのある散文作家チャールズ・ラム、トマス・ド・クインシーによって書かれた作品に関して、生成過程を重視する立場から読み直しを行ない、代表作として正典化される過程で見落とされた側面を浮かび上がらせる。そのために、まず、作家たちの書簡や日記に当たり、定期刊行物への寄稿にも注目して、当時の生活と政治的社会的立場を跡づける。

(2) その上で、時事的な言論活動とそれ以外の文学作品執筆の間の相互的影響関係について考察し、代表作が生み出された過程を実証的に検討し、新たな作品解釈の可能性を探る。それはまた、その後の作品受容の歴史に光を当て、さまざまな要素が整理あるいは付加されて、現在作品批評の与件として存在し、作品を素のままでは読みにくくしている正典化の問題の再検討を伴う。

4. 研究成果

(1) 2010 年度

- ① イギリス・ロマン主義時代の政治・社会の動き、一般大衆の動向などを理解するために、経済、社会、職業との関わりに重点を置いた最近の研究書を閲読し、文学生成に及ぼす影響源の広がりについて知見を深めた。
- ② 作家同士の交流について、ワーズワス、コールリッジ、ラム、ド・クインシーの書簡と日記を幅広く読んだ他、ラムを軸とした関係の捉え直しを主張するフェリシティ・ジエムズの著書を閲読し、友情による作家の共同体構築が作品生成に大きな影響を与えた点を理解した。
- ③ 当時の出版業界と上記作家たちの関わりについては、ワーズワスがシントラ条約反対の小冊子を上梓する際、ド・クインシーを代理としてロンドンに派遣し、校正と出版の交

渉に当たった過程で生じた、大物出版業者ダニエル・スチュアートとの錯綜した関係に焦点を合わせ、ロマン主義文学者たちと当時の出版業界中枢との深い関わりを辿ることができた。

④ 以上を踏まえて、文学作品が作家たちの置かれている歴史的社会的文脈の中から生成されてくるものであり、夾雑物を捨象したニュークリティズム的な純粋物ではないことを改めて確認し、言論活動や交友関係を含む作家の活動全体の中から、作品が生成されてくる過程を捉える重要性を認識した。

なお、本年度の研究は、ロマン主義文学者たちと時代及び言論出版業界との関係をめぐる見取図の作成という基礎作業に時間を要し、まとめて今年度中に論文という形で成果を出すことはできなかった。成果の発表は次年度以降に持ち越された。

(2) 2011 年度

- ① イギリス・ロマン主義時代の政治・社会の動き、海外進出の状況、出版界、世論、一般大衆の動向などを理解するために、特に今年度は詩人コールリッジとバイロン卿及びこの二人の作品を出版したジョン・マリーの関係についての文献を読み込んだ。
- ② 作家同士の交流が作品生成に及ぼした影響について、コールリッジとバイロン（さらには両者とマリーの）間で遣り取りされた往復書簡を精読し、作品成立への影響について考察した。
- ③ 当時の定期刊行物及び出版業界と作家たちとの関わりについて、コールリッジの代表作『クリスタベル』に対するバイロン、ハズリットなど他のロマン主義作家たちの雑誌・新聞での反応と論争について一次資料を丁寧に読み込んで、作家たちの相互関係を考察した。

④ 当時の歴史的社会的条件の下、言論活動や交友関係を含む作家の活動全体の中から、作品が生成されてくる様相を、特に『クリスタベル』に焦点を絞って考察した。その結果、この作品が当時の歴史的社会的文脈の中から生成され、20年もの歳月を経て出版された後、当初の酷評から次第に評価を高めて正典化され、その過程で実際にはありえない伝説が付け加えられていった様子を、特に無数にある草稿と出版の際の複雑な事情に光を当てながら解明し、「一八一六年六月十八日のクリスタベル—バイロン、ハズリット、シェリー—」という論文にまとめた。これは、2011年末までに執筆を終え、年度内に論文集『亡霊とイギリス文学』（国文社）に収められて出版される予定だったが、他の寄稿者の遅延により刊行が次年度にずれ込んでしまった。

（3）2012年度

① 雑誌『テイツ・エディンバラ・マガジン』に作家ド・クインシーが投稿した一連の記事を読み、言論活動や交友関係の中から作品が生成される様相を具体的に論じ、そこで私事を暴露されたワーズワス、コールリッジおよびその家族との関係の変容、記事が読者大衆に与えた影響について考察した。

② 政治的に極めつけの保守派だったド・クインシーが政治的急進主義を標榜する媒体『テイツ』を寄稿の場にしたことで、平等主義的立場を取り歯に衣着せぬ物言いが可能になったという、出版媒体の特性による逆説的効果を探り当てた。

③ ド・クインシーが『テイツ』に掲載した記事を改訂して単行本化した『湖水地方と湖畔詩人の思い出』と20年近く前の雑誌連載記事とを比較対照することにより、文学史上での正典として成立するまでに辿る様々な経緯を明らかにし、それを‘Thomas De

Quincey’s Portrait of the Lake Poets: Individual Reality and Universal Ideal’（『英米文学』73号、2013年3月）にまとめた。

（4）全体を通して

① まず、この研究の第一の眼目である、ロマン主義文学作品の生成過程については、作者コールリッジによる20年に及ぶ執筆・改訂期間を経た後、詩人バイロンとその友人である出版業者マリーの助けを借りて出版された『クリスタベル』と、雑誌に連載されて物議を醸した後、やはり20年近い歳月を経て大きな改訂を加えて出版されたトマス・ド・クインシー『湖水地方と湖畔詩人の思い出』の二つに焦点を合せ、作品が生成された当時の様子にできるだけ接近することによって、この作品は誰々の代表作で、主題はこれという定式化、正典化が既に行なわれてしまった作家たちの作品に新たな読みの可能性を発見し、作品が本来持っていた予想外の起爆力を確認することができた。特に同時代の仲間であるロマン主義作家たちの間に両作品が巻き起こした憤激には驚きすら感じ、現代の読者が作品生成当時に認識されていた奔放な喚起力を忘れて定式的な反応に終始していることが実感された。

② 作品として成立した後、それが出版界、批評界の中で、作家の中心的作品として正典化されていく過程については、最初の執筆、改訂、出版という生成過程そのものが、既に歴史性、社会性を含んでおり、さらに、その後の時間的流れの中で、それぞれの時代の歴史性や社会性を加えられて正典化されていた作品から完全に歴史性を捨象してしまうことは不可能であり、また同時に、作家が作品に籠めようとした審美的要素を全て歴史性に還元して矮小化してしまうことも不

毛にして不可能な試みであり、芸術性と歴史・社会性の上で均衡を保ちつつ、作品生成過程とその後の受容過程を精査することで、文学批評の可能性は開かれると確信するに至った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

Akira Fujimaki (藤巻 明)、Thomas De Quincey' s Portrait of the Lake Poets: Individual Reality and Universal Ideal、英米文学、査読無し、73巻、2013、69-94、

[図書] (計1件)

富士川義之・結城英雄(編)、国文社、亡霊のイギリス文学—豊饒なる空間—、2012、81-98

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤巻 明 (FUJIMAKI AKIRA)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：30238604